

優秀賞

壁の向こう側にいる人

早稲田大学 3年 葉山 瑠

一度すっぱりと切れた縁をもう一度結び直すのは、とても勇気がいる。特に、自分から切り、さらに間に壁を打ち立てた場合には。

私の交友関係は「狭く深く」で、数は少なくとも一度仲良くなれば深い関係になる。しかし一度だけ、その時の親友と揉め、衝動的に「距離を置く」と告げたことがある。それは高校三年の秋で、それから卒業までほとんど口もきかず、その後も一切連絡を取らなかった。彼女とは高校の三年間同じクラスで、常に行動を共にしていた仲だったが、その時の私は腹を割って話すことや歩み寄ることではなく、「もういい」と拒絶して縁を切ることを選択したのだった。その後は違う友人とよく話し、意図的に彼女を避けたのだから、文字通り自分で壁を打ち立てていた。

このことは割り切ったつもりでも何年も心にしこりを残していた。意識していたわけではないが、大学進学後の人間関係の構築にも少なからず影響を与えていたのだと思う。コロナ禍に家族以外との接触が一時的に途絶えたことで、私は持て余す時間で人との繋がりを考えていた。こんな今だからこそアナログな方法で旧友に連絡してみよう、と暑中見舞いの葉書を何枚も書いた。その時、彼女のことか思い浮かんだのだった。振り返って、自分が作って向こうの人を置き去りにしたままの「壁」に向き合う時なのではないか、ふとそう思った。

携帯のメモ帳でまず文面を練った。それから、とっておきの万年筆を使って、一字一字丁寧に、綴った。後悔とかではない、あの時離れることは、それぞれ譲れないものを守る為には必要だったと思っっているから。けれど、あの時よりは大人になって、器が広がったと思うから。もう一度あなたと話がしたい。向こうはもう忘れたいかもしれない。そんな不安で、葉書を出すことも何度も躊躇した。それでも意を決してポストに投函したとき、壁が崩れて、向こうの顔が見えた気がした。